

冬季オリンピックピック招致と

志賀高原岩菅山の自然保護



わたなべ りゅういち
(信州大学教育学部志賀
自然教育研究施設)

1947年東京に生る。東京都立大学院生物学科を卒業。1977年より長野県志賀高原にある信州大学の自然教育研究施設に勤務。

地域の自然を理解することで新しい自然と社会のあり方を考える活動をめざしている。

渡辺 隆一

一九八七年十二月十九日と一九九〇年四月五日とは一生忘れられない日となった。前者は志賀高原の岩菅山に長野冬季オリンピックピック招致のため、巨大なスキー場が建設されることが発表された日であり、

後者は多くの人たちの長く苦しい開発反対運動の中で、それが突然に中止となった日なのである。私にとっては、岩菅山問題は突然に降り掛かり、そして突然に中止となった、いかにも振り回されてばかりの二年半であった。簡単に言えば、実に多くの自然保護にかける力が結集して、冬季オリンピック招致を名目とした岩菅山開発という、社会的には強者の自然破壊の意向を翻させた運動なのであったと思う。その経過を振り返り、この運動の中で何が行われ、何が問題だったのか私なりの視点から考えてみたい。

冬季オリンピックピック招致と志賀高原岩菅山開発問題の簡単な経緯

一九八五年十二月十八日 長野に冬季オリンピック招致準備委員会設立。長野県自然保護連盟も参加、「自然保護に十分配慮するよう」要望。

一九八六年六月九日 山ノ内町でアルペン、白馬村でノルデックと決定。この時の不明瞭な選定が最も大きな疑惑として後々まで問題になり続ける。

一九八七年十二月十九日 五輪開催計画書を決定、公表。志賀高原の岩菅山に巨大なコースが描かれている。

一九八八年二月二十七日 長野県自然保護連盟が最初の「五輪と自然保護」学習会。岩菅山開発問題について、科学的立場から調査団をつくり対処することとした。三月二十九日県に対し、自然保護への留

意を要請。四月二十三―二十四日に第一回岩菅山現地調査を行う。

三月二十六日 全日本スキー連盟(SAJ)が岩菅山視察。四月十六日にも日本オリンピック委員会(JOC)が視察。

五月十六日 長野冬季オリンピック招致自然保護専門委員会が設置された。

六月一日 JOC総会で長野市が国内候補に決定(旭川、盛岡、山形)。

六月十七日 志賀高原岩菅山自然環境調査委員会(以下、岩菅山調査委員会)を長野県が設置。

七月十一日 山ノ内町の有志で岩菅山問題を地元として「考える会」をつくる相談をする。

七月二十八日 地元「岩菅山を考える会」発足。最初は反対するための会ではなかった。

八月十八日 長野県自然保護連盟「岩菅山コース開設は問題、他の地域に移すよう」要請。

十一月三十日 長野県勤労者山岳連盟「岩菅山コース建設反対」声明。以後多くの民間団体が反対声明、要請をするようになる。

八九年一月二十九日 長野県自然保護連盟「冬季五輪と自然保護シンポ」開催。招致に大資本の利害の影や五輪そのものの体質の変化を指摘。

四月二十二日 山ノ内町において「冬季五輪と自然保護シンポ」、岩菅山を考える会と長野県自然保護連盟の共催、賛否多数の意見が討論された。

九月二十五日 日本生態学会が「岩菅山コース開設反対」の要請を招致委員会、県知事、長野市長らに提出。その後、日本は乳類学会(十月二十四日)、日本山岳会(十一月十七日)等が相次いで反対要請を行う。

九月二十六日 岩菅山調査委員会が「裏岩菅山コースを支持する」最終報告書を提出。渡辺は辞任した。

十月十二日 長野冬季オリンピック招致委員会が全国組織に改組され、堤氏が名誉会長になり、いよいよ表舞台に登場してきた。

十月二十九日 長野市長選挙で「五輪反対」だけを訴えてきた江沢のりこさんが現職市長(約十万)に対して一万五千元票を獲得し、五輪問題の大きな広がりをもたらした。

十二月十九日 猪谷IOC理事が「岩菅山開発反対の意見書がIOC会長らに届いている」と報告、自然保護問題が国際的になってきた。

十二月二十日 (財)日本自然保護協会が「長野冬季オリンピック招致計画に関する岩菅山地域の保護についての意見書」提出。

一九九〇年一月十三日 北海道自然保護協会が「岩

菅山コースをとりやめ、県下の既存スキー場を利用する」よう要望書提出。

一月二十二日 招致自然保護専門委員会、裏岩菅山案を多数とした報告を提出。

二月十三日 招致委員会、IOC(ローザンヌ)へ正式立候補届出。

三月一日 (財)日本自然保護協会は国際自然保護連合(IUCN)のスワミナサン会長に「五輪開催にあたってIOCは自然環境への配慮を最優先するよう働きかける事を求めた書簡を提出。

三月二十二日 SAJによる岩菅山現地視察、堤会長は多少のコース変更で自然保護への配慮をした修正案を自らのホテルで記者に発表。

三月二十七日 (財)日本自然保護協会による「修正案」への反論、その後WWFJ他も相次いで反対意見。

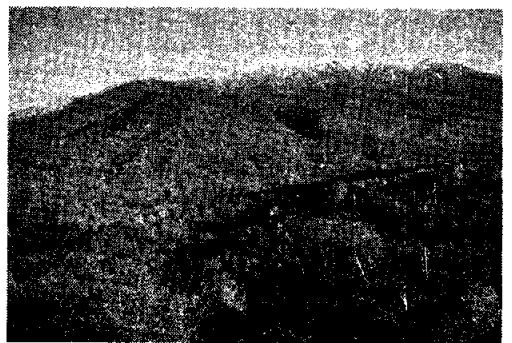
四月五日 堤JOC会長による岩菅山開発断念の突如の発表。

四月十二日 堤JOC会長辞任

以上が岩菅山問題の大きな流れです。この中で私は地元では山ノ内町の青年達を主にした「岩菅山を考える会」に一住民として、長野県自然保護連盟には自然保護を訴え運動する立場から、県の岩菅山自然環境調査委員会には研究者として、また日本生態学会の要請文の作成、送付には地元の会員として、参加協力をしてきた。それぞれの会や組織は性格や立場が異なるわけで、個人としてはその使い分けが難しい場面もあった。

八五年に冬季五輪が話題になり、やがて長野市を主催都市として山ノ内町と白馬村に競技を分担する

という計画が明らかになり、その中で志賀高原にアルペン競技がくると言う噂がたつた。これは大変なことになるのではな



岩菅山、山すそは紅葉、山頂部は雪をかぶって白く輝いていた(奥志賀より1989.10.18)

ないかと心配していたところ、八七年十二月十九日に長野冬季オリンピック招致委員会の計画書が発表された。なんとこの志賀高原の奥地、スキー場だらけの中にあつて開発から残された最後の山、そしてこの地域の最高峰の岩菅山に巨大なスキー場が作られることになっている。

私は志賀高原にある信州大学教育学部の自然教育研究施設という全国でも唯一のユニークな研究所に一九七七年以来勤務し、学生や観光客、地元の人たちに自然の大切さ、楽しさを実際の自然の中で話し、ともに自然について考える活動をしてきた。志賀高原は巨大な観光地の割には奥行きのある豊かな自然が残されている。その地元で突然、巨大な開発話が持ち上がったのであり、当然に見逃ごせない大問題であった。しかし、これまで各地の自然保護運動に側面から参加してきた経験から、実際に自分でそう

おりに(財)日本自然保護協会の工藤父母道氏に冬季オリンピックの名目で開発されようとしている岩登山を実際にみてもらった。志賀高原の余りの開発ぶりと対照的に残された岩登山、その対岸の焼額山に開発拠点を持つ国土計画KKのホテル群とを見て、岩登山の開発は自然保護上問題が多いと意見は一致した。以後(財)日本自然保護協会は機関誌「自然保護」誌上で岩登山と冬季オリンピック問題を集中的に取り上げ、全国的に、またIUCN等国際的にも大きな運動を展開してくれた。岩登山の地元、山ノ内町でもこうした県や全国レベルで問題になっている岩登山の開発を自分達の問題として考えなければいけないと考える人ができて、七月の末にやっと「岩登山を考える会」ができた。以後毎月集まる中でお互いの情報や考えを基に問題点を話し合い、やがては岩登山開発反対を町の中での圧力に屈せず明確に宣言するまでになった。

今回の長野冬季オリンピック招致の過程の中では、「なぜ、山ノ内町がアルペン競技で、あのアルペン王国と言われた白馬村がノルデックなのか」は最大の謎であり、これこそが、今回の招致運動が企業のためであり、欺まんだとする声の起きる背景である。そして、この問題に関心ある人たちとも連絡を取りつつ、問題点の検討をする中で「岩登山の新規開発は止めるべきである、どうしても冬季オリンピックを長野へ招致したいのなら、既設のスキー場でやるべきである」と言う基本的な考えが生まれ、八九年一月に長野市で、四月には地元山ノ内町で「冬季五輪と自然保護シンポ」を開催する中で主張していった。企業が裏にいる招致運動という側面が次第に明らかになってゆく中で、岩登山開発へのこだわりを続ける長野冬季オリンピック招致は、それ自身がま

すまず不透明なものになってゆき、岩登山問題は県民ばかりでなく広く全国的にも大きな広がりを持つようになった。(財)日本自然保護協会を初めとして、北海道自然保護協会、日本生態学会、ほ乳類学会、日本山岳会、全国労山、全国自然保護連合等は次々と岩登山開発反対声明を出し、招致委員会はばかりでなく世界中のIOC委員に向けても自然保護要請が行われた。中でも北海道自然保護協会がかつての「札幌オリンピックによる恵庭岳の自然破壊」という経験を持っていただけに、反対声明(NC七〇号一九九〇・三月参照)のみならず、その貴重な経験を基にかつての運動の経過の情報や実際のアドバイス、また現地調査への参加等、遠路にもかかわらず実に強力に支援してくれた。

県の岩登山調査委員会の中で多様な研究分野からの調査報告や意見を聞いてみると、分野によって自然保護にたいする見方がずいぶん違うものだということがよくわかった。地形・地質班は防災という視点が強く、技術的な検討がなされていた。動物、植生はもっぱら現況調査に徹したが、その評価については全く個人的見解にたっていた。地域の自然やそこに生息する生物達の価値や意味については、確かに今のところ客観的に説明できるなんの論理もないということがよくわかった。それで力不足は知りつつも岩登山の自然を志賀高原や山ノ内町全体の中で、できるだけ客観的に評価する必要があると考え、「植生評価」という調査項目を担当し、いくつかの試みを行った。以上の個別的項目に対して景観は自然の要素とその社会的な評価の両面を含んでおり、単なる言葉以上に総合化された科学であり、こうした開発問題に対してはもっとも大きな比重があるべきと考えられる。しかし、植生と同様客観的な評価

法が確立していないようであった。こうして岩登山調査は長野県における大きな社会問題であるという背景もあって、それぞれにかなり精力的に行われたが、各分野の報告に基すく相互討論の機会はずしも十分ではなかった。この二年間にわたる県の岩登山調査委員会の最終報告は、一九八九年九月に提出されることになり、数度のまとめの委員会が開かれ、そこで初めて研究者による自然保護問題が集中的に討議された。これまでの報告では科学的、客観的に議論されてきた委員会での意見は、途端に冬季オリンピックに対する個人的見解の相違から多様になり、一致した文章には到底まとまらない。長時間の討議の結果の「種々検討した結果、裏岩登山変更案でやむなし」ととれる結論には私としては賛成できずに、最終段階で辞任願いを提出した。

この岩登山調査委員会の目的は「長野冬季オリンピック、アルペン競技の滑降コース等に予定されている志賀高原岩登山の施設整備予定地域の自然状態を把握するとともに、自然保護への配慮等を総合的に検討する」とあり、五輪の是非を議論するものではないはずである。しかし、今回の結論の中の「オリンピック競技の開催のためには、競技コースとしての条件を備えた施設が必要であることも現実の課題である」という部分は、明らかに自然科学的調査の範囲を越えている。研究の分野によって開発に対する見方が異なるのはやむを得ないし、個人によっても評価が異なるのはしかたがない。しかし、冬季オリンピック自体の評価をする必要はないはずであり、岩登山の科学的調査の結果とその問題点の指摘だけで、十分であったはずだと今も考えている。一般に大学の研究者が通常つきあうのは学生や同僚、同分野の研究者といった狭い範囲であり、それがこ

的利用エリア、c. そうした人間活動や保護が、自然にどの様な影響を与えるのかを長期間に調査研究する実験エリア、の三地区を設けることになっていく。つまり国際的には、残されたものをただ守るといっただけではなく、積極的に、世界の自然の質を高めるように回復させ、人間生存のためのよりよい環境を作り出そうとまでしているのである。

そういう点からみると、開発の対象となっている岩菅山の北面はまさに、そうした回復のためのエリアに相当していると考えられるのである。一度は伐採の手が入ったとはいえ、オオシラビソ、コマツガ等の針葉樹を中心に森林への回復は徐々に始まっており、人の踏み込めないこの広大な領域は現在、クマやカモシカの良好な生息地となっている。そして、この岩菅山西面は、反対側の魚野川原生地域の前面に位置して、人間活動からその貴重な自然を守るための緩衝地域となっているばかりではなく、それ自身も原生的自然へと豊かに回復しつつあるのである。失われてしまった自然は、二度と還らない。この残された魚野川原生流域という貴重な自然を守ることは元より、それに接する岩菅山西面も、もはや新たな開発に手を付けることなく、豊かな自然へと回復させることが、観光を中心とした志賀高原の生活にとって最良の道であろうと考える。

二 地域開発のあり方は、そこで生活する住民が主体的に選択すべきである。

地域での生活はそこだけで完結しているのではなく、東京や広く世界にさえつながつているとはいえず、その重要な部分はやはり地域の自然条件に多くをたよっているのである。地域の水源や農林業の資源となり、さらに、観光で生きるここ志賀高原にとって

自然はことさらに重要なものである。この地域内での大きな開発はこれまでにも、又これからも地元住民の生活に大きな影響を与え続けてゆくだろう。とすればその開発のあり方は住民本意のもの、住民が自ら学習し、開拓し、選択したものでなければならぬ。その意味で、これまでの志賀高原の自力開発によるスキー場としての発展が好ましい事例として各方面から高く評価されてきたのである。もちろん大資本の導入も一つの選択であるといえ、それも確かに一つの方策ではあろう。しかし、この場合にも、地元住民への十分な説明と合意の形成が計られる必要があるだろう。

今回の岩菅山へのスキーコースの新設は、単に一時だけのものではなく、その巨大さと規模の大きさの故に、既存のスキー場配置やそのあり方にも、極めて大きな影響をもたざるを得ない。又、長野より競技場までの道路も新設されることになっているが、そのコースいかんではこれ又人の流れが大きく変わる。こうした点について、これまで、地元での十分な検討が行われたとは到底言いがたい。コースは岩菅山でなければならぬのか、外にコースが考えられないのかも含めて、地元で再検討する必要があると思われる。

地元においては、岩菅山は山ノ内町の象徴として手を付けずにおく方がよいだろうというのが大勢ではないかと私は考えている。こうした地元住民の感情を、オリンピックという錦のみ旗で上から一方的に押えつけるのは民主的なことではないだろう。地元の人たちの心からの協力のえられないような行事は無意味であり、虚しい。今日の岩菅山スキーコース新設問題について地元住民が十分に検討し、選択できる機会を設けるべきであると考ええる。

